

「白茅」(1943 - 1945) 考一 『申報』 文芸欄の間隙

梁 有 紀

富山大学人文学部紀要第70号抜刷

2019年2月

「白茅」(1943 - 1945) 考一『申報』文芸欄の間隙

梁 有 紀

I. 『申報』文芸欄と「白茅」

『申報』影印説明(上海書店1982年10月¹⁾)によれば、「『申報』は一八七二年四月三十日(清同治十一年三月二十三日)に上海で創刊され、一九四九年五月二十七日終刊に至り、旧中国²⁾で出版された期間の最も長い新聞紙」とある。また、その間、「抗日戦争初期には、上海『申報』は一度停刊し、あいついで、漢口版(一九三八年一月十五日から七月三十一日)、香港版(一九三八年三月一日から一九三九年七月十日)が出版された。一九三八年十月十日に『申報』は上海で復刊した。一九四一年十二月八日太平洋戦争勃発後、『申報』は敵の偽政権下で出版された」という。

二十世紀初めの新文学誕生以降、上海の報刊紙上で主たる文芸欄となる「申報自由談」は、1911年8月24日頃から始まり、1920年代には、「常識」欄(法・道徳系)、「遊芸叢刊」、「平民周刊」等の関連欄を伴いながら、「自由談」は、1935年10月31日に一旦休止となる。1938年10月10日に復刊するも、1942年6月を機に³⁾、1942年12月以降は日本との時局面が多くなる変化を伴い、1943年8月13日に「自由談」は休止となる。

「自由談」休止中の1937年は、「申報 文芸専刊」「申報 娯楽専刊」「児童専刊」「春秋」欄等で、文学芸術が紹介される。復刊後の1942年には、「春秋」「風雨同舟」欄とともに、「小談」「健康」「隨筆」等の欄を持つ「自由談」は、特に「小談」欄を中心として、時世を反映した興味深い文学等も掲載されるが、1943年8月13日休止後は、文芸・文学は、「申報周刊」1943年9月6日復刊1号⁴⁾として受け継がれていく。

文芸欄「白茅」は、1943年3月7日星期日(日曜日)に発刊された。以後日曜(七)面(白茅1-2)、月曜(五)(白茅3-17)、月曜(四)(白茅18-19)、水曜(四)(白茅20-25)に掲載され、1943年9月6日の「申報周刊」復刊後は、「申報周刊」(一)に掲載されるようになり、月曜(白茅26-47)、金曜(白茅48-69)、日曜(白茅70-104)⁵⁾、土曜(白茅105-116申報周刊復刊91号1945.7.7)に掲載される。

その後、木曜(二)(白茅117-118)、金曜(二)(白茅119・1945.8.3)、木曜(二)(白茅120・1945.8.9、白茅121・1945.8.16)に掲載される。

そして1945年8月20日、「自由談」が復刊となる。

『申報』文芸欄「白茅」は、近現代中国大型新聞『申報』の主たる文芸欄「自由談」の間隙を補うように、日中戦争末期の文芸欄として存在した。

半世紀以上経た後世になっても、その存在自体が認識されることなく、研究の空白の一つであろう「白茅」文芸欄では、どのようなことが表現されていたのか、その存在意義も含めて考えてみたい。

文芸欄「白茅」の命名および発行主旨について、創刊号に掲載された「芻蕘之言—代『発刊詞』」(編者)から見てみる。

文芸は花であり、実である。だが我々は言う、文芸は草であると。文芸は美しい草であり、芳しい草である。だが我々は言う、文芸は野草でもあると(中略)。

これまで草は小人に喩えられてきたのが、草の憎むべきところで、愛すべきところ。小人の喩えは、へぼ学者の話で、一笑にも値しない。文芸が不屈なのは、蹂躪され消滅しても、またもとに戻る。

多くの美しい名花、甘い実は、もともと草木であり、どの家草が野草によって成長しないものがあるか。草、野草は、多くの美しいものの根源である。文芸は人類の美しい行為の表現であり、草で象徴されるのは、もっともなこと。

薬草は病を治す、身体の病を。文芸も病を治す、精神の病を。荊棘(イバラ)、しつり(ハマビシ、消炎剤)ですら、諷刺の辛辣な文芸作品に匹敵する。

「遠芳侵古道、晴翠接荒城」とは、正に草の美しさは、醜悪な古道と荒城を覆い隠すということ。「池塘生春草」は、水たまりの中にこそ生氣がある。(中略)

草が美しいのは、このように例証、枚挙にいとまがない。芸術が美しいのが、草に代表出来ないと誰が言えようか。

草の中でも我々が好きなのは茅、白茅。よって我々の文芸刊行物の名を「白茅」とする。

白茅は高大、雄奇でないが、山野に遍生し、独特の侮れない氣勢がある。

白茅の咲いた花は美しくないが、生まれ始めの柔軟さと潔白さがある。(中略) 見る価値が凡俗の花とは違う。

ツバナは茅針で、子どもたちが食むのを喜び、甘くて、香しい。根は成長すると薬用になり、甘くて、その湯を飲めば、発汗通気によい。茎や葉の柔らかいのはマグサとなり、老いと家屋を蔽い、よい燃料にも。不用なところはない。(中略)

我々の「白茅」は、文芸界の白茅となることを望む。偉大な精神と、非凡の美しさで、人に補う効用は小さくない。

「名列前茅」に、先鋒の意があるなら、我々も文芸界前進の茅となることを願い、大隊を率い、前へと、高く、目的として、昇って行く。

我々がこのようにするのは、自ら願ってのことで、興味と熱心で、決して名利と権勢ではない。将来成就し、前進する時代の巨輪を動かす一手になるなら、誉。「分茅列土」。

文芸は草に象徴されるとして、山野に遍生し、根は薬用にもなり、あらゆるものの根源で、

不用なところのない「白茅」を、文芸刊行物の名とするという。「蹂躪され消滅しても、またもとに戻る」「不屈な」文芸は、「草に象徴され」、荒れた世にこそ草の美しさが必要で、水たまりの中に春草の生気があると述べ、「文芸界前進の茅となることを願って」発刊された。荒れ果てた苦しい世の中に、少しでも希望をのせて、不屈の精神で、未来へと繋げようという趣旨のもと刊行された文芸欄「白茅」は、全121号からなり、その構成は、小説、詩、エッセイ、芸術（劇、映画、音楽）評等が多くを占める⁶⁾。作品に求められた字数は、「五千字」（『白茅』微稿略例」1⁷⁾）から、「二千字以内」（「白茅啓事」69）、「二千字程度」（「投稿須知」79）に、「純文芸作品歓迎、斬新、前進、力あるものを」「二千五百字ぐらい」（「微稿簡約」85）、「題材は斬新で」「体裁は小説、散文、詩が主で、文芸理論は受け取らない」「三千字を超えず」（『白茅』微稿簡則」110）、「本刊歓迎一千五百字以内短稿」（120）と、紙面率変化も伴いながら変化し、時局難による物価高および紙代高騰との関係性を窺わせる。

『申報』文芸欄の間隙に生まれた「白茅」文芸欄は、戦中の、荒廃した世の中を背景に、一縷の希望の灯⁸⁾として生まれたといえる。その中には、当時の現況を表現しているであろう作品が多く存在する。作品の中に描かれた当時の時代背景から探ってみたい。

II. 貧しさの現況

当時の環境における人間の生き方の理想が、「色的禮讃」（赫文3）で述べられている。色はあらゆるものの象徴で、「色には視覚、嗅覚、味覚、聴覚がある」という。各色に象徴性があり、人の生活と環境と色の関係もある。心、魂、人生、未来との関係についても述べ、色と人間との関係性を以下のように言う。

世界には、色の旋律、色の調合があり、進歩をもたらす。人類の中でも、色の調和、色の跳躍があつてこそ、温存と熱情がもたらされる。

我々には純潔な色素が必要である、真と美の色が。人々は皆大自然の中の各種の色を好む。それは素朴や自然であつて、決して虚偽の誇張ではない。（中略）

各人が好む色は、人格や性情を表す。（中略）

若者と老人が必要とする色も違う。（中略）

各人の生命は、色彩によって反映される。（中略）

我々の生活には各種の色素を欠かせないが、濃厚な色に執着し過ぎると、世間で疎まれ、本当の人生の味わいを失くす。色彩が少しも無ければ、寂しい空虚な日々に入る！人生の意義も理解出来ない。純潔な色素の配合調節を知る者には、充実した人生が！

各種の色素があるからこそ、我々は単調な世界の中で生活することはない！（最後）⁹⁾

世界には、各種の色が存在するからこそ、保たれ、進歩する。人類も同じである。虚偽の誇張でなく、純潔な色素の調合、調和が必要であると。人の命は、色彩によって反映され、色が

過ぎると、バランスを崩し、人生の味わいも失くす。純潔な色素の配合調節を知る者には、充実した人生があり、各種の色素が存在するからこそ、単調でない世界が存在する。

世界の中の各種の色の存在と、人類の中の、色で反映される人間の特性が、掛けられているものと思われる。この世は単色ではありえない、調合、調和であるべきと。

日中戦争下で、「抗戦」か「和平」かの二者択一論議（「文學運動的幾個問題」史新1）のあと、上海陥落後は、「和平」の親日派政権下で生きざるを得なかった人間の、生き方の理想というものが反映されているのではないかと思われる。しかし現実の庶民の生活は、貧苦との闘いである。以下に、それを見してみる。

戦争で生活が一変し（「練習生」19、「旧話重提談節約」20）、物価高で高騰する中で生活する困難が、多くの作品に見られる。

柴が高くて夜学で盗みを働き（「賊媽媽」20）、郷里の物価も去年の二三倍に膨れ上がり（「蝕」57）、物価高の狂乱のため日中働き夜に書き物と涙にくれるが涙だけが唯一の慰みとなる（「涙」62）。故郷も災難で（「貧病交響曲」93）、米の値が日に日に高騰し、六万五、六万八、七万二、七万四……と（「米」100）。賭博や借金で難を逃れられず¹⁰⁾、戦争が全てを打ち砕き困窮し（「杜先生」22）、生活難で学校に行けず（「書匠子弟」22）、貧しさから本屋で盗難する（「賊」47）。1944年の春も駄目だったと嘆く質屋と丁稚（「典当裏的春天」47）に、靴下繕いで夜なべする母は目を患い、成人しても父母に頼る辛さは富裕層の学生子女には分かるまい（「襪子」47）と、格差も見られるなかでの経済的困窮が描かれる。現実に対処して乗り越え生き抜こうとするも逃れられない現実の困難に覆い尽くされていく。

生活とは戦争でもある（「第二戦線」56）といい、父母亡きあと生活の困窮から祖母のため商人の妾になり（「恵」69）、弟の面倒を見ながら、児童読み物の中と三食儘ならない現実との違いを訝しむ子ども（「非分」114）もいては、貧困のため、授業料（「父親」32）、食糧（「娘嬢」40）、教育費・生活費（「念阿弟」49）、入院費・医療費（「蝕」57）、自立（「自立」118）、肉（「肉」96）、水（「水」106）等、各生活面が常に脅かされ、父母の不在（「離愁」87）も常套化し、誕生日を祝ってもらうことも儘ならない¹¹⁾。さらには、ダンスホール（「褪色的夢」26）、麻雀（「慧姑」48）、アヘン（「陳媽」67）、身売り（「命運」29）、赤子の運命（「心曲」34、「啼一題一個孩子的誕生一」104）、子捨て（「第三個孩子」71）、養子（「阿順」111）、囚人（「浮生一章」71）等が常に生活と隣り合わせの難題として浮上してくる¹²⁾。

悪人、盗みが横行し¹³⁾、社会が混乱していく中ひたすら汗水垂らして働き続ける劳工や奴隷の労苦は増す¹⁴⁾。その一方で、社会では、学歴を生かすことすら難しく、卒業しても就職難または即失業¹⁵⁾で、結婚も孤児同士等（「貧病交響曲」93）、頼るべき縁のない状態が続く。

女性の地位や生き方についても描かれるが、決して恵まれた環境とはいえない。女性の学歴の有無と、家に嫁ぐか人に嫁ぐかの結婚形態と、自らの思いとの中で三人三様の生き様を探る

娘たち(「嫁衣」46)が描かれる一方で、生活の糧の為ダンサーになり(「循環的矛盾——位女性的供状!」68)、男女交際発覚後は辞職となり(「糖」91)、勉強し出路を探すも富裕者と結婚せざるをえず出路はないのかと嘆き(「出路」109)、女性の自立の難しさを春の燕で表現する(「寄一」113)など、職業女性の悲哀(「不平凡的邂逅」115)もなくなる。新女性、結婚せずにダンサー、墮胎、妾、娼婦、寡婦、花売り少女、洗濯女¹⁶⁾と、苦境の中でも生き抜こうとする女性の強さは見られるものの、纏足が残るように、社会的弱者に追い込まれるという旧社会の弊害から抜け出せず、当時の世相の暗闇を背負う形での女性の姿が見られる。

病が流行して¹⁷⁾、子どもたちや少年を蝕み¹⁸⁾、T. B.細菌が蔓延しては、侵略軍のように人間の体の全臓器に忍び込み家族や全てを奪う(「我和T. B.細菌搏闘」113)。主に肺結核で命が奪われ¹⁹⁾、別れは避けられない²⁰⁾。死は、家族、子、父母、祖母、友、鳥、にまで至り、犠牲、凍死、墓等が居並ぶ問題として存在する²¹⁾。

街頭風景は、荒れた地での底知れぬ寂寞と悲しみが、黄昏と静寂の早朝を背景に描かれることが多く、それでも僅かに洩れて来る家からの微かな煙や匂いを生活の糧として、行きかう人々や露店のあり様が、多くは詩の形式を伴い、描かれる²²⁾。

夢や理想や愛²³⁾は、閑、寂寞、沈黙、空虚と化し²⁴⁾、苦しみから抜けられない²⁵⁾。しかしその中でも何とか暗闇から光明を求めようともがき²⁶⁾、人生を思いながら²⁷⁾、旅に擬えては²⁸⁾、次世代に託していこうとする²⁹⁾。書と燈を標とすることも³⁰⁾、次第に難しくなり、歳月に想いを馳せても、変化を思い知らされる³¹⁾。

各人各色の尊重が理想とされながら、現実には、貧しさ一色に覆い尽くされている。貧しさを描くしかない現況の中で生きる者の苦悩が如何様のものか、次に見てみたい。

Ⅲ. 苦悩と仮託

当時の世の中の「安らぎ」が、どのようなものであったのか、「安慰」(梁椽24)を見てみる。

安寧は、どの人にも必要、特に苦悩の中を彷徨っている青年には。

もしも安寧を求め安寧に沈殿するなら、安寧は陰險な敵となりかわる。

人には愛が必要だが、ただこの中に酔うなら、悔恨がそばにやって来る。

慰めは励ましを必要とし、人を成功奪取へと押し上げる。

苦悩の中の人間には、安寧が必要であるが、沈殿し過ぎると、陰險な敵に変わり、愛に酔うなら悔恨が伴ってくる。安らぐことすら儘ならない現実が見られる。

さらに「熱情」と「懷疑」について、「漫筆」(梁椽25)の中で、次のように述べる。

熱情とは、疑いなく、成就の基本動力。

高度な熱情を抱けば、人を驚かす事績を作り上げる。

しかし熱情は冷める日を避けられず。

理智によってコントロール出来れば、より剛毅な熱情を燃えたぎらせる。

熱情は、物事を成就させるには必要で、より高い熱情を抱けば、事績も伴うはずだが、冷める日も来る。よって理智のコントロールが必要で、理性でコントロール出来れば、熱情がより強くなるはずだと述べる。成功への熱情が求められる一方で、理智のコントロールも求められる。常に鼓舞激励しなければ過ごしていけない状況下での冷静さも見られ、生き難さが見られる。

続く「懷疑」では、

懷疑がなければ、進歩はない。

懷疑はワクチンのようにあなたを強くする。

しかし、あなたにしっかりとした立場、果敢な判断がなければ、それは永遠にあなたを彷徨わせることになるだろう。

と述べられる。懷疑心は、進んでいく為には常に必要で、自身を鍛えるためにも必要である。しかしそれにも堅固な立ち位置としっかりとした判断が伴わなければ、永遠に彷徨うことになるという。常に張り詰めた中で、理性をどのようにコントロールするかが問われ、試行錯誤を繰り返しながらも、慎重に自らを奮い立たせている様子が見受けられる。自らの中で常に揺り動かされながら、思考し、悩み、迷う。迷う状況下で、悩みは、どのように昇華されていくのか、見てみる。

「風箏」（蘭54）は、春の陽光の中、空にあがる風、人生が象徴される。

「聡明さ」と「物理作用」と「紙と竹と糊」で作られた風は、「教育も受けられない子どもたちに、天から授けられた聡明な技能」であり、「純朴な魂」,「気質」,「偉大な成功と発明」であるともいう。そして、

弱く細く上がる風は、風にまかせ、どのように圧迫され打ちのめされようと、まるで精神を犠牲にする芸術の殉道者のように、自然の中の最後の一笔を完成させようと、不撓不屈に真っすぐ青空へと上がっていく、負い尽くせぬ使命でもって。これは最も好く人生を象徴しているとも思う。人生を季節で形容するなら、春はたいてい意を得る時で、個人の事業の成功は、美しい環境を手にするが、意外な挫折もあり、その間は忍耐と、幾許かの才智も必要。打撃を恐れず、失敗を恐れず、自らが成功しないことを憂えず。只自らの努力不足を愁う。然る後に、穏やかな段階を得て、風に揺られ真っすぐ青空へ。しだいに風が雲間に放たれていき、いかなる牽制も受けず、最後の解脱を要求したかのように、最後に、風に乗って消えていく。私は感慨を覚える。個人の事業、地位、名誉も、然るべき時期にとまり、自らを反省し、驕り狂う境地に陥らないようにすべきだと。本来の自分を保存し、完全を求めず、完敗を求めず、中庸の道には、保存すべき価値がある（最後）

これまでの人生の道のりが、弱く細くても挫けず空に上がっていく風に重ね合わされている。

「自らの努力不足を愁い」、「完全」「完敗」でない中庸の途に、本来の自分を見つけないという。

思い悩み、迷う状況の中で、悩みが、直接的にはなく、間接的に、星や植物をはじめとする自然現象や、事物に仮託されていく様子が多くの作品にみられる³²⁾。その中の「飛蟲」(鮑忠祈71)を見てみる。

部屋の中に燈火。無数の飛ぶ虫が、周囲を飛び回る。ブンブンと音を発して。楽しい歓呼か、力尽きた声か。ついに燈火にぶつかり、焼かれ、羽を傷つけられ、一つ一つ落ちていく。窓の外、飛ぶ虫は、依然前へ後ろへ、ブンブンと！

人々は笑うが、笑うなかれ！あなたも社会の中の飛ぶ虫である(酬移助学)(最後)

小さな生き物の生態に、人間たちの置かれた状況を見る。虫の生態と人間の生き様の酷似が述べられる。さらに「一隻蜜蜂」(蔣衛羣76)を見てみる。

網戸の中で、どこから来たか分からない蜜蜂が、盲目的に網戸に頭をぶつけ、ブンブンと。さらに激しく頭をぶつけて。馬鹿さを知らずに、光明を求め、道も分からず、意気だけで追求し、一生懸命に死ぬまで、それでも網戸の中。光に辿りつくことはない。

社会にもこのような馬鹿な一群が、盲目的に光りを求め、理智でもって思索、考慮をせず、結果底知れぬ深闇に陥る。

強盗や、賊や、悪人が、決して生まれてからすぐに、盗み、賊、悪人に振り分けられるのではなく、光明を追い求めるために、道を踏み外し、ついには自分の意気だけで事を成し、抜けられない道に陥る。世界中で生活する人で、光明を願わない人があるだろうか？

「ブン！……」次第に弱っていく蜜蜂、フラフラぶつかりながら落ちていく。私は無意識に網戸を開けてやる。微風に吹かれ、嬉しそうに、大自然の懐へと飛び立ち、元気を取り戻したかのようだ(最後)

網戸の中で光を求めて、盲目的に飛び回る蜜蜂に、社会の中のある一群の人間像を見る。生まれつきに悪人や賊の型に振り分けられるわけではない。光明を求めると、抜けられない道に陥った。次第に弱っていく蜜蜂に、抜け出すことの出来ない人間を重ね合わせて、無意識に扉を開けてやることでしか、心を解放することが出来ない人間の苦悩を見ることが出来ないだろうか。同時に、光明を願うことの出来ない社会への批判も忍び込まれているようである。

網戸の中で飛び回る蜜蜂と、社会の中の人間のあり方に相似関係を見る。蜂の習性の中に人間界の社会の縮図を映し出す。自然界の生き物などに託して述べる³³⁾だけでなく、事象の中にも人間の生活の中の状況と同類のものを見出す。「談襯托」(嚴克78)は、引き立ての原理に、美術技法と人間生活の相似関係を見る。引き立ての原理に象徴される、美術論と、人間関係論である。黒を引き立てるための白が、美術の引き立て原理なら、人間にもあると。他人の不幸との対比で自らの幸福を味わうが、行き過ぎると、自らも第三者との関係性の中でその原理に組み込まれる。「強者の中の強者」、「悪人の中の悪人」にも、「引き立てるものと、引き立てら

れるもの」の関係性、効能が存在する。「電灯は夜に輝き、昼に効果を失うように」、行き過ぎると、「苦しめられた者の苦しみを味わうことになる」。苦しみの中にも、引き立ての原理が存在し、濃淡を生むがごとく、苦しみの中にも更なる苦しみが存在するという。

貧しさの現況の苦しみ、それを描くことしか出来ない者の苦しみ、そして少しでも解放されようと他に目を向け仮託するも、苦しみを昇華することが出来ない。昇華しきれない苦しみとは何であったのか。

IV. 狭間に生きた人間の心の軌跡

人類の殺し合いの嘆きが、「人類」（心影78）に見られる。

人類よ！千万年以前、我々は元々祖父を同じくし、母を同じくする。今あなたが私を惨殺するのは、兄弟を惨殺すること。人類よ！愛し合えないか！（中略）我々は同じ自然の嬰兒。人類みな手足は、同一祖先。なにゆえ相闘うか？なにゆえ相争うか？死ぬのは自分の同類で、殺すのは自分の兄弟。人類よ！人類！どうしてこのように狂うのか？どうしてこのように愚かなのか？なにゆえ相惨殺するのか？なにゆえ互いに墓を掘りあうか？自然が子女を愛すように、どうして兄弟を愛せないのか（移酬助学）（最後）

惨殺する世の中を、嘆き悲しみ、悶える。纏わりつく悶えは他の作品にも見られる³⁴⁾。人類の煩惱と欲望の関係について、「煩惱與慾望」（張詩洲66）で、次のように述べる。「欲望がなければ、人類は進歩しなかった！」だが、「文明を享受すれば、同じ程度に煩惱に纏わりついてくる苦しみもあり」、「煩惱と欲望は互いに比例し」、「人類の欲望が高まれば煩惱も伴う」。「我々二十世紀の人類は、様々な福を享受したが、憎むべき煩惱も附いて来て、心を痛めつけるという、不幸に」。「精神の苦しみを減らすには、欲望を抑える必要がある」。欲望は進歩に必要なだが、それには悶えが伴ってくる。特に戦時中等も含め、二十世紀は人類の欲望と悶えの関係から逃れられない状況にあるということであろう。

人に必要な学習と発揮について、「推動和補助」（70）で、次のように述べられる。

人には二つの時期がある、学習時期と、発揮時期。

学習時期とは、素質、志向、家柄、環境を必要とし、発揮時期とは、識見、財勢、機会、精神を必要として、成功の基礎を作り上げる。

だが、実際、誰もが条件を備えているとはいえない。では、「誰もが成功するという希望」は無駄な話か？いや！欠乏を補うという特徴があるから。では、「失敗」は余計な言葉か？いや！もしこれら利用できる基礎原則を力尽くさず推し進め、この種の補助を受けようとしないなら、結果は失敗！

ああ、彷徨っている人たちよ、君たちの「学習が一つの問題なら、将来もまた一つの問題！」という感傷的論調はやはり「我々の野心を情熱で動かし決意に向け、能力を気迫で

動かし努力に向ける時、まさしく我々の成功に必要な補助がやって来る時！」という楽観的論調にはならないだろうか？(維翰寄自東京)(最後)

欠損を補って少しでも成功に導きたいという楽観的論調を願うが、暗闇もいつしか一筋の光に、という鼓舞激励型の論調は、他にも多くある³⁵⁾。「生活之鞭」(沈劍影103)を見てみる。

生活、/ある人は言うあなたは鞭だと。/私もそうだと・/私の神経の中に-あなたの叫びが、/私の感覚の中に-あなたの傷痕が。/あなたに威力があるなら、/青年たちの気を抑え、/青年たちの切っ先を鈍らせ、/それ以上豪放にさせず、/麻痺させず。/このため- /人々も呪詛し、無情の強迫を恨む。/しかし、/これも鍛錬? /どうして-/我々は出来ないのか/「鞭打ち」を「動力」にして、/懸命に、力強く、着実に!?(最後)

生活を「鞭」だといい、この厳しさを「鍛錬」として「動力」に出来ないだろうかという。しかし自らを何とか奮い立たせようとするも、免れ難い悔恨が纏わりついてくる。この時代と自らを嘆くのが、「控訴」(黄沙110)である。

この時代、我々の情感はとても複雑で(中略)、一日に幾度も変化し、毎分同じ感覚でない。敏感過ぎるからか、憂鬱だからか、真面目すぎるからか、環境への要求が高すぎるからか、生活に疲れてるからか、精神は物質をこえ、自己の情緒は不断の激しい闘争の中に。

激しい闘争の発生は、この複雑な時代のため、複雑な矛盾を持つ。この種の矛盾は、単純な情感問題でなく、単純な理智問題でもない。多くの理智は克服出来、情感は発展出来るが、事実はそう簡単でない。

自らの憧憬と礼讃は遠くに別れを告げ、夢の中。(中略)古を想うも、もがいてきた昔は、消息なく、灰となり、空虚と感傷の中に落ちる。

現実に向き合って、生活の勇気を鼓舞するも、衣食住の為だけで、狭小な個人の物質享受は、自己の青春、光陰を消耗させる。

職業は生活の為であり(中略)、自らの要求とは程遠い。

最も悲惨な現実の制限は、一切の問題の見方が、黒であるべきが、白になり、実際は善なのに、罪悪の汚れを塗る。このような顛倒、黒白の混淆は、世故に長けた人には、大したことでないが、熱情に溢れた人には「冷静な理智」でコントロールし、何とか自らの敢えて信任せざることを書く。この種の矛盾の心理は、時に本来純真な心を挫き「空虚で冷淡な正義感の欠けた亡霊」に換える。

望んでのことか?

事実は最も正確で、あなたにこのようにすることを求めても、すぐにあなたは顧慮しなくなり、疑い深さ朦朧深さが害に。これまた理論で、この種の現実主義の見方は、最後の結論。

問題はこのような結末でなく、仕事も、種種雑多な生活問題も、衣食住の解決にも、数

えきれない煩惱が付き纏って来る。都市の季節は変わりやすく、都市の物質欲望も恐ろしいが、生活は都市の中なので、この物質の享受を奪取する為に全精神を消耗。

童年の熱情と憧憬は、顔のしわと共に老いた。個人の泥濘に陥り、狭い利益のため旧社会に屈する？

これは願ってのことか？

愛、恨み、新、旧、真理、邪説、事業、前途……

分ちがたい矛盾が、この時代の青年の心を交錯する。この種の矛盾の中で転げ回る青年は、毎日毎時、極度に激しい闘争の中に。このため、興奮、消沈、歓喜、悲哀、希望、失望、茫然、朦朧、彷徨、徘徊……、一日に何度も変化し、毎分情緒は同じでない。

情緒の弓弦が張りすぎると、ある日切れる。心の底に埋蔵していた矛盾の激流が決壊する日。その時が、この時代の壊滅の日なのか（最後）

情熱や憧憬は、顔のしわと共に老い、遠く昔の夢の中。もがいてきた人生も灰となり、胸に残るは交錯する矛盾。毎分毎秒常に心は変化し、揺れ動き、定まることを知らない。情緒の弓弦が張りすぎて今にも切れそうになる、心の中の矛盾が決壊するように。矛盾の激流の決壊がこの時代の終わる時なのかと。行く末を見据えての心の状態の吐露であると思われる。

白茅最後の121号の最後の文章は、「我的影子」（端木夢歡）である。見てみる。

よく分からないことがある、理由はわからないが、（中略）人は本当に時に自分が分からなくなるのでは？（中略）愛すものを愛し、命も惜しまない。恨むものを恨み、借りを作らない。

静けさと自由を求めて、深夜にベランダで腰かける。想いたいものを想い、見たいものを見て、深い藍色の空と煌めく星のように、誰にも干渉されない静けさの空気を吸う。

楽しい時は、日に何通か手紙を書き、意が乗らない時は、筆すら取らない。

酒を飲むのが好きで、少し酔った時を懐かしむ。その時が最も無邪気で愛おしく思う。「高らかに泣き」、 「揮毫する」ことも出来る。私には分からない、何が理智で理智でないのか、私に分かるのは本当の心だけ、……

これは私の影、私の性格の写実。

このような訳のわからない事、あなた分かりますか？そう！私自身にも分からない、どうしてこのようになったのか！

本当に、あなた方も常々このようでは？自分の情感が抑えられない等……（最後）

自分で自分がよく分からなくなる。心を解放し自由になりたい。何が理智なのかも分からず、情感が抑えられなくなる。確かなのは自分の影、本当の心。これが、1945年8月16日の最後の誌面に掲載された「白茅」最後の文章である。

悶え、励まし、悔恨し、そして影となる。「白茅」とは何であったのか。

白茅三周年の百期を記念した文章が、「紀念白茅百期」(100)である。見てみたい。

其一 胡生権

多くの人は時間を恨む、どれほど残酷かと。(中略) 時間に罪はない、公平な記録であり、何が退化で何が進歩かを顕す。

白茅は創刊から今までに、すでに百期出た。それは退化なのか、それとも進歩なのか？それは非常に複雑な問題。栄養不良の子が十分な健康を望むのが難しいように。今がどんな時でも、あなたの泣く歌で人さまの情緒を動かせるか？けれども、それは屈強に生長し、生長した。疑い無く、その前途は遠大である。

もしかしたら人は、目を世間に向け、白茅を二期読んで、ぶっと吹き出し、何これ！と笑うかもしれない。けれど、言おう、その笑いこそ、白茅が大切にするとところ。文章を書く多くは、熱烈な意欲で文章技巧の拙い青年。その生長は寂しくない。毎日受け取る多くが「作家」の文章でなくとも、大仰に言えば、それは文芸界の苗代といえる。

更に言うと、白茅は完全に成熟した作品ではない。それは文芸を愛する青年が、汗かき耕し、彼らが、他の刊行物で待ち望む読者が耐えられない時に、白茅で真実の声を出す。僅かでも彼らの文章が、彼らの良心を躍動させる！

時間は公平な記録で、百期以後の白茅が、もしかしたら新しい面目で上海文芸界に出現し、それが退化か進歩か、公正な人々に評定される。私は願う白茅の読者と作者を守り、努力して成長していくことを！（最後）

其二 陳心

二年前に白茅の一期が我々の前に。そして百期。創刊辞で編者が言ったように「我々の白茅は文芸界の白茅となり、偉大な精神と、非凡な美しさで、人に少しでも補う効用となることを望んだ」。

正しく名の通り、白茅は野草であり、名花でない。名花に慣れ親しんだ人には歓迎されないかも。しかしどの家草が野草から成長しないものがあるか？「春風吹いて生まれる」、どの名花に活力が？風に吹かれ雨に打たれても？

もちろん、百期には不満、欠点がある。この園地を支える殆どが若者だと思い至れば、この欠点もお許し頂けるかと。そうでしょ？ここには生氣は充満してるでしょ。

未来へと、白茅は若く、生氣と活力を漲らせることを望み、もうすぐ成長していくことを信じる（最後）

「白茅」文芸欄は、当時の世の文芸メディアに足りないものを、少しでも補うべく、真実の声で、書き続け、発行し続け、成長を願って、未来に繋げようとした。上海における近現代中国大型新聞『申報』の主たる文芸欄「自由談」が頓挫している時に、間隙を縫って現れた「白茅」文芸欄は、如何なる状況下でも描き続けることが文芸存在の信念として、当時の状況を克

明に描き、描くものの心の襞まで表現し尽したといえる。それは、底知れぬ貧しさの状況から、その中で生きる者の苦悩、そしてそれらを昇華すべく、この世の他の現象に目を向け、類似の形を見て取っては、仮託し、心を些少でも解き放とうと試みた。無残な現実の前で、どうすることも出来ず、自らの来たる道を嘆き悲しむ。しかし1945年8月16日まで発行し続けた執念は、後世の我々は認識すべきことなのかもしれない。まさしく如何なる状況下でも、野に生きる野草「白茅」のように存在し続け、未来に託そうとした文芸欄の意義だったのではないだろうか。

1943年から1945年の日中戦争下の陥落した上海で、文化や文芸が振るわないなか、「抗戦」ではなく「和平」政権下で生きざるを得なかった知識人の苦悩が描かれていたと考えられる。戦時中に関係国の狭間で生きた人間の心の軌跡が表現されていたといえるのではないだろうか。

「申報自由談」に多くみられるような「遊戯文章」や諷刺的「批評空間」³⁶⁾とは違い、また、1940年代初めに位置づけられる抗戦期文学や日常的恋愛文学とも違う、1943年から1945年の文学の位置づけの再考が求められているといえるのかもしれない。同時期の、研究空白ともいえる他の文芸刊行物に顕著な特徴である「出口のないやるせなさ」³⁷⁾や「書き残す意義」³⁸⁾に通底するものがあると思われる。

「白茅」文芸欄が掲載された「申報週刊」内の記事には、戦争に邁進し必勝を願う記事の転載や、奮闘する上海市政の記事³⁹⁾等が掲載されている。これらとの関係性をどのように見るのかも今後考えるべき課題であると思われる。

1943年から1945年は、同じ上海で活躍した女性作家の張愛玲が旺盛に作品を発表した時期⁴⁰⁾でもある。今では人気の張愛玲のこの時期の作品の多くが愛され耽読されている一方で、目を背けられがちな間隙に、生を追及し続けた文学状況も存在していたことを今この時代にあらためて認識しておきたい。

注

- 1) 以下、本稿では、この影印版を主たるテキストとする。戦時中のものため、文字の不鮮明なところも多い。のちに参照したデータベース（関西大学東西学術研究所蔵）は、更に遺漏、誤字・脱字が多く、適宜補った
- 2) 「旧中国」は原文のまま引用。新中国建設以前、つまり中華人民共和国建国（1949年10月）以前を指すのであろう
- 3) 「1942年6月、日軍当局が〈対於〈申報〉及〈新聞報〉所希望之事項〉を發布し」「12月」「陳彬和が〈申報〉社長に就任」（李相銀『上海淪陥時期文学期刊研究』上海三聯書店2009）
- 4) 「申報周刊」内の記事の多くは、日本の新聞雑誌等からの翻訳である。『朝日新聞』『毎日新聞』『読売報知新聞』『飛行少年』『実業之日本』『朝日画報』『週刊毎日』『同盟世界週報』『海洋少年』『大陸雜誌』等
- 5) 103号は土曜
- 6) 付録の「白茅目録」を参照。目録作成に際しては、判読困難な文字等は適宜『申報索引』（上海書店）等も参照して補ったが、『申報索引』にも遺漏・誤り等も見られ、データベースと照合しても、なお不明なところもあった
- 7) 以下、作品名の後の数字は、「白茅」番号
- 8) 毎号の「白茅」表題には、手に灯を握った挿絵が添えられている
- 9) 文芸欄「白茅」の作品群は、各作品の最後の段落にメッセージ性が込められる形式が多い。
以下、引用において、作品末尾である場合には、「(最後)」と記す
- 10) 「阿龍的毀滅」21, 「一個孩子的毀滅」23, 「存摺」51, 「小杏」55, 「往情」95
- 11) 「生日」80, 「辛勞的行程」84, 「誕辰」93, 「生日」118
- 12) 赤子が産まれても先行きが慮られ（「心曲」「啼一題一個孩子的誕生一」）、孤兒院から養子に出されても実子が出来れば生活難のなか白眼視され「痛い」生活になり、それでも地獄から天国に来たのだと思いたい（「阿順」）
- 13) 凶悪人にも道理がある（「伸訴」99）。ミルク無く盗むが帰宅すると子は亡きがらになっている（「生的悲劇」（小説）30（独幕劇）38）。本屋での盗難者を皆で追い捕えるが見送った後に罪悪感が残る（「賊」47）
- 14) 勞工（「老爐工的悲哀」29, 「勞工之歌」33, 「生活在勞工群裏」35, 「学徒」37, 「路工」92）。黙々たる犠牲者（「使女 勞工歌集」43）。奴隸の桎梏（「奴隸之泣」47）。奴隸の愛情の歌を聞きながら考える（「奴隸的愛情」114）
- 15) 就業記が失業記になる女性の自立の難しさ（「就業記」39）。卒業時の感懐（「畢業」77）。「卒業即失業」（「畢業後」97, 「給將畢業的朋友」98, 「往那裏去？」116）。就活、コネ、リストラ、金まみれの社会に立ち向かおうとする（「我與社會」112）
- 16) 新女性（「蜜斯 K 的風頭」34）。纏足と新女性（「脚的遺憾」70）。母子家庭の娘が歌い手に（「違心之曲」84）。ダンサーと墮胎（「明珠暗投」92）。「女優は世界で最も高尚な職業」という言葉を噛み締める（「女演員」94）。娘は借金のかたに妾になり墓の中（「小杏」55）。娼婦（「夜巷」76）、寡婦（「寡婦的等待」48）、花売り少女（「海的夢」50）。「世の中も、汚れを洗うことが出来たら？」と呟く洗濯女（「洗衣女」94）
- 17) 「寄林」27, 「雨夜」98, 「病」103
- 18) 子が病気で書売を（「書的命運」41）。児童病室での出来事と格差（「小惠」66）。子が肺炎で金の工面に奔走（「債○○○」108）。病院のベッドの上の引き取り手のない少年たち（「帰宿」83）
- 19) 「悼亡友」55, 「蝕」57, 「悲惨世間」92, 「遙祭」107
- 20) 別れの哀しみ（「離愁」100）。病の彼女に再会（「不曾發光的彗星」115）
- 21) 家族の死（「月夜」28）。死の悲哀に転売と身売り（「命運」29）。妻の死（「傷逝」107）。夫の死（「鐫」

- 112)。子の死（「生的悲劇」30・38）。病で子を亡くした医者（「鑽鑽」73）。父母の死（「阿麟的墮落」34,「像曉星般 零亂的回憶」59,「惠」69,「九年忌」77）。祖母の死（「惠」69）。友の死（「懷友人」34,「別友」36,「竹青之死」54,「悼亡友」55,「悼亡友」60,「木偶」62,「提琴的故事」79,「別後」107）。友情（「婦路」105）。墓（「晚秋漫歩」34,「三年」61,「殞星」86）。凍死（「陳媽」67）。鳥（「雞一童年雜誌一」116）。犠牲と死（「為工作而犠牲」108）
- 22) 街頭（「街頭一景」97,「感懷」101,「烟蒂火」105,「街景」117）。占い人（「卜者」42・56,「病 拆字攤」103）。パン売り（「面包」87）。餅売り（「老餅師」111）。笛吹（「笛手」102,「賣笛的」109）。風沙（「砂粒」96）。沙漠（「操琴者」39,「駱駝」45,「沙漠夜」58,「沙漠行」59,「沙漠之行」92）。荒野（「勇士之歌」57,「更聲」112）。黄昏（「人生小唱 黄昏」27,「短歌三章 黄昏的時候」92,「黄昏」105）。くず拾い（「拾荒者」36,「寒冬吟」46）。物乞い（「暖流」41）。質屋（「典當裏的春天」47,「存摺」51）。車内（「受寵」117）。商店（「老牌林文烟」119）。酒酔い（「詩二章」119）。落ち葉（「桐葉」35）。水辺の子（「戲水」75）。蘇州河（「蘇州河」101）。月夜（「月下」82,「月夜」89）。夜の街（「夜行」98）
- 23) 夢（「夢」21,「老爐工的悲哀」29,「夜曲」92,「阿藍」104）。理想が碎かれ辞職（「表姐的来信」74）。愛（「愛的飄逝」33）
- 24) 「閑」34。寂寞（「寂寞的故事⊖」42,「寂寞的故事⊖」43）。沈黙（「沈黙之章」97）。空虚（「今天天光還亮」57）
- 25) 苦（「訴苦」100）。金錢苦（「世紀末的瘋狂」71,「做父親的悲歌」80,「拾遺記」106）。生活苦（「処世」82）。流浪（「無家漢」99）。子の出奔（「塵埃」110）。苦しみの中の自立（「自立」118）。崖（「在窮崖絶谷裏」48）。黄昏（「黄昏的啓示」43,「黄昏」63）。苦い味の杯を飲み干す（「苦杯」50）。希望を乞う（「希望」50）。真の友情とは挫折や失敗の後にある（「語絲」52）。崑曲は我が国正統の歌劇で愛する者見逃すなかれ（「蘭心聆歌」56）と、自国の伝統的芸術に触れる機会も希少で愛おしまれる
- 26) 暗闇から光明（「黑暗中的前進」17,「在黑夜裏」21,「静夜」30,「生之旅程」33,「別再彷徨—給慧君—」38）。秋冬から春（「晚秋漫歩」34,「春臨」45）。自由（「解放了的人」44,「莫留戀過去」46,「感情的舒展」107,「再會吧！上海」118）
- 27) 「燈話」40,「走」41,「生命的真諦」48,「人生」92・106・114,「生之激盪」111
- 28) 路と旅人（「路」26,「我愛旅行」52,「遙遠的途徑」55）
- 29) 衰えた齒車となっても死なない心は次世代に繋ぎたい（「一隻殘老的齒輪」45）。望みは未来だけ（「做父親的悲歌」80）。生まれてきた子に父が語る, 君は世界の主人である（「做爸爸的話」89）
- 30) 書（「書命的運」41,「読書」54,「論誑言之類」89,「描写自己」91,「窗下草」113）。手紙（「小簡」103）。返信（「自由—覆劉臨」106）。詩（「詩之王国」91,「讀『星底夢』」109）。暖炉の火（「暮色炉火」93）。燈と蛾（「燈的故事」98）
- 31) 歲月（「勞工之歌 憶…」33,「歲思」43,「三年」61,「父親老了」63,「戲水」75,「九年忌」77,「痕跡及其他」102,「傷逝」107,「苦葉」99, プレスレットと亡夫（「鐳」112）。故郷（「鄉思」36,「夜渡太湖」74,「喜鵲與烏鴉」82,「憶南湖」109,「小鎮的人」113）。帰郷（「回鄉記」120,「小母親—寄W—」121,「古城」90,「塔」91,屋敷（「烟雲」94,「獅子岩」95,母（「膝下晨昏」110,公園（「憶舊遊」110）。再会（「浮萍輯」108,「孤獨者」109,「不曾發光的彗星」115,「舅父」116,友との再会（「重逢」73,「婦路」105,校長との再会（「老校長」75）。幼年時代（「憶兒時 童年生活片段」72,「友愛永徘徊」80）。魯迅（「七年了 紀念魯迅先生逝世七周年」32,「魯迅七年祭」37）。枯れ井戸（「枯井」75）。「海島」101。墓と髑髏（「浮生若夢」117）
- 32) 流星（「人生小唱 流星」27,「流星」64・108）。星（「孤雁」49,「竹青之死」54,「隕寒」105,「九月夜」111,「星星」119）。巢箱（「愛鳥之想」21）。種と実（「勞工之歌 種子」33）。春（「希望」50,「望春草」101）。「雪」93。霧（「霧之歌頌」104）。波濤（「海濤的啓示」63）。「梅」96。水辺の駱駝と沙漠（「捧夫」103）。燈（「燈」25,「燈火管制之夜」28）。酒精と油カス（「短簡 談做人」62）。ギター（「我愛吉他」95）。鈴（「歡樂底鈴聲—給姊妹—」100）。風箏（「風箏」58）

- 33) 籠の鳥 (「人生小唱 籠鳥」27)。鳥 (「秋夜」37)。蟬 (「夏夜談蟬」24)。燕 (「春燕」49, 「燕來了」60, 「望春草 3燕子」101)。カラス (「窓前的鴿影」63)。火取り蛾 (「飛蛾」68)。「蚊」76。「蟋蟀」84
- 34) ドイツの降伏, ヒトラー, ナポレオンから, 南京の役人に言及 (「逆流 並序」113)。「懷疑者」120
- 35) 鼓舞激励 (「歌」37, 「浪花」112)。詩人の役割 (「詩人」74)。犠牲は新生の前奏 (「無題」74)。「欠陥之美」75。「生活和工作」78。「温情」98
- 36) 李欧梵「『批評空間』的開創—從『申報』「自由談」談起」(『二十一世紀雙月刊』総第十九期 1993年10月号)
- 37) 梁有紀「一九四〇年代雑誌『新東方』文芸欄の一考察」(『南腔北調論集』東方書店 2007年7月)
- 38) 梁有紀「雑誌『小天地』(1944—1945) 考」(『富山大学人文学部紀要』56号 2012年2月)
- 39) 「白茅」99号から116号までの同誌面上に, 周佛海題字の「上海市政」の記事が, 第四期(1945年3月4日)から第二十期(1945年7月7日)まで掲載されている
- 40) 1943年1月から12月にかけて「二十世紀」に英文でエッセイ類を發表後, 1943年5月から『紫羅蘭』『万象』『雜誌』『古今』『天地』『新東方』『小天地』『苦竹』等の雑誌に, 後の代表的作品集『伝奇』『流言』等に収録される作品群を, 1945年8月まで毎月数編ずつ精力的に發表。張愛玲文学の特徴の一つである「蒼涼」(もの寂しさ)との関係性の考察も出来るのかもしれない

白茅 1943.3.7. 星期日
「芻蕘之言一代『發刊詞』」編者
「文學運動的幾個問題」史新
「編者的話」
「嘉陵江上」章甦
「『白茅』徵稿略例」

白茅 1943.3.14. 星期日
「論中日文化溝通…以最誠懇的心獻給林房雄先生…」鄭誦
「第一次失眠」方明
「率真和應酬」林華傑
「擠與推」凌慶年
「無題」洛沁
「『杞憂』—劇壇的新危機」孟朗
「期望—獻給白茅文藝週刊」啞吁

白茅 3 1943.3.22. 星期一
「回響去吧！」何人
「我更瘦了」翁
「春憶」沙雲
「色的禮讚」赫文
「編者的話」

白茅 4 1943.3.29. 星期一
「上海文芸界的再建」青之
「櫺窗的一角」陳楷
「魂」宋濂
「人面設計」韻聲
「期望」東浦
「我怎樣消遣我的黃昏」方瓊
「編者補白」
「販運」天民(画)

白茅 5 1943.4.5. 星期一
「憶故鄉」胡明揚
「愚翁小傳」凡中
「粗野的呼號」史亭
「感觸和意見」肖洛
「落花—獻給南妹—」莎菲
「船中」魯岩
「啓事」

白茅 6 1943.4.12. 星期一
「孩子的春」祖仁
「憶兒童節」袁鷹
「不肖子女」方瓊
「爸爸的頭髮白了一—未定草之一—」史亭
「陋巷中」哲庸

白茅 7 1943.4.19. 星期一
「成敗小言」胡力
「我底大褂兒」惠人
「玉谿詩論」審寄
「人間」穆之
「老鞋匠和他的妻子」溫凡
「請領稿酬」

白茅 8 1943.4.26. 星期一
「如何才能產生好作品」譚子安
「春風帶來的回憶」慕斐
「碎錦」宗文
「被摧殘的生命」史亭
「麻醉劑」李漢璉
「反求諸己」周驩
「哥哥」田野
「在昏黃的燈光下一悼華兒—」雲岩

白茅 9 1943.5.3. 星期一
「拾針記」宋濂
「『秋之歌』從小說到銀幕」譚惟翰
「別呻吟—獻給穆之一—」森林
「富翁」元傑
「春天小唱」瓊
「論新詩的發展」胡明揚

白茅 10 1943.5.10. 星期一
「顧先生的悲哀」史亭
「希望」魯陽
「詩的通俗化與方言性」東方
白茅 11 1943.5.17. 星期一
「六年來『都市生活』的感想」凌祖仁
「憶魏金枝先生」張心鵬

「詩人的悲哀」宋濂
「『新』女性素描—獻給 W」金如霆(更正:史亭)
「啓事」白茅編輯室

白茅 12 1943.5.24. 星期一
「學徒日記」龍兒
「夜」修經
「微弱生命的沒落」凌祖仁
「銀灰色的希望」袁鷹
「更正」白茅編輯室

白茅 13 1943.5.31. 星期一
「孩子在摸索」史亭
「讀書雜感」周驩
「鈔票公的自傳」凌祖仁
「寒冬之暮」黃廷鐸
「馮先生加了薪」余懷瑞
「飢餓」萬里

白茅 14 1943.6.7. 星期一
「詩人和乞丐」史介元
「志願」子午

白茅 15 1943.6.14. 星期一
「黃媽」馮大文
「信仰」萬里
「幻想中的歡樂」胡明揚
「小樓書簡」烟萍
「路工之歌」胡若流
「信筆話『酒』」
「啓事」白茅編輯室

白茅 16 1943.6.21. 星期一
「母親」李學平
「論『新文芸』底創作者」征原

「爸爸的眼睛睜着」天棄仲弼

白茅 17 1943.6.28. 星期一
「內容與形式—文芸写作雜譚—」趙驥
「我的老師」培基
「都市裏的流亡群」宋濂
「黑暗中的前進」胡明揚

白茅 18 1943.7.5. 星期一
「文芸の新価値」鄭定文
「誰の錯」兩言
「根生」祖燮
「夜工」胡若流

白茅 19 1943.7.12. 星期一
「練習生」未文
「我們前面的路」稀蕃
「啓示」白茅編輯室
「一個小問題」平則

白茅 20 1943.7.21. 星期三
「旧話重提談節約」□棟(健棟)
「文学創作精義」応遷善
「我愛光明的太陽」
「賊媽媽」袁鷹

白茅 21 1943.7.28. 星期三
「無辜」葉克文
「阿龍的毀滅」東方
「在黑夜裏」戎希純
「夢」張心鵬
「愛鳥之想」上路忠雄

白茅 22 1943.8.4. 星期三
「杜先生」俞若文
「書匠子弟」章祖燮
「舵手的歌」白璧

白茅 23 1943.8.11. 星期三
「一個孩子的毀滅」小麟
「詩二章」文嘯
無月之夜
給一
「暴風雨襲来的時候」平青

白茅 24 1943.8.18. 星期三
「一九四三年夏上海」袁鷹
「号角」藍漪
「安慰」梁椽
「夏夜談蟬」徐輝光

白茅 25 1943.8.25. 星期三
「惡魔」潔茹
「粥的來源」龔光照

「漫筆」梁椽
「熱情」
「懷疑」
「壁」藍漪
「燈」静波

白茅 26 1943.9.6. 星期一
(『申報周刊』復刊第一号)
「褪色的夢」任淑芳
「路」于思
「落葉」浪沙(南歌子)
「教師吟」梁燮
「搖襪女」沈潔

白茅 27 1943.9.13. 星期一
(『申報周刊』復刊第二号)
「焚書」夜人
「寄林」頌藍
『人生小唱』藍漪
「黄昏」
「籠鳥」
「流星」
「面孔」鄭悶
「程先生的苦悶」季維一
「断思零感」徐輝光
「生命的浪費」
「自省」

白茅 28 1943.9.20. 星期一
(『申報周刊』復刊第三号)
「月夜」著文
「燈火管制之夜」綠洲
「應考記」○○
「田園雅興」浪沙
—南鄉子—
「愛」○佐
「青年之敵」紹祺?

白茅 29 1943.9.27. 星期一
(『申報周刊』復刊第四号)
「老爐工的悲哀」凌祖仁
「二十誓」沙雲
「小茶房」司徒琦
「羽頌」村汀
「命運」劉嘉蒞

白茅 30 1943.10.4. 星期一
(『申報周刊』復刊第五号)
「生的悲劇」俞若文
「農夫之子」徐揚
「静夜」趙驥
「教室雜写」士貞
「点滴」晦菴

白茅 31 1943.10.18. 星期一
(『申報周刊』復刊第六号)
「雨景」儀宣?
『平湖散絃』小麟
「逆旅」
「百合橋」
「夜街行」
「牛子兒的厄運」章祖燮

白茅 32 1943.○.○.(10.25.)
星期一(『申報周刊』復刊第七号)
「七年了 紀念魯迅先生逝世七周年」羅旅
「歌」文英
「○○○女○○囚○○○」管仁發
「父親」言焱

白茅 33 1943.11.1?. 星期一
(『申報周刊』復刊第八号)
「愛的飄逝」亦聲?(學)
『勞工之歌』水漪
「鐵工」
「憶··」
「種子」
『詩二首』士雄
「慚学」
「光陰」
「生之旅程」諷漢

白茅 34 1943.11.8. 星期一
(『申報周刊』復刊第九号)
「懷友人」唐敏
「密斯 K 的風頭」方林
「晚秋漫步」純心
「心曲」○(魯?管?)金
「阿麟的墮落」季維

「閑」○○○（陸尋庭）

白茅 35 1943.11.15. 星期一
（『申報周刊』復刊第十号）

「生活在劳工群裏」祖仁
「桐葉」孫鐵城
「在窮崖絕谷裏」希純

白茅 36 1943.11.22. 星期一
（『申報周刊』復刊第十一号）

「生活」茹志鵬
「拾荒者」水漪
「別友」滋春
「鄉思」火木

白茅 37 1943.11.29. 星期一
（『申報周刊』復刊第十二号）

「秋夜」張惠南
「歌」胡若流
「魯迅七年祭」戎戈壁
「無題」言式之
「学徒」叔菴
「黃園賞菊」鄒湛如

白茅 38 1943.12.6. 星期一
（『申報周刊』復刊第十三号）

「生的悲劇」（独幕劇）陳明
「夜之謳歌」純心
「別再彷徨——給慧君——」潔亞

白茅 39 1943.12.13. 星期一
（『申報周刊』復刊第十四号）

「就業記」龔光照
「操琴者」魯宛

白茅 40 1943.12.20. 星期一
（『申報周刊』復刊第十五号）

「娘姨」袁鷹
「燈話」儀宣

白茅 41 1943.12.27. 星期一
（『申報周刊』復刊第十六号）

「暖流」諸葛心
「書的命運」○○（秦德）
「征士吟 閔山月」藍漪
「走」燕時

白茅 42 1944.1.10. 星期一
（『申報周刊』復刊第十七号）

「寂寞的故事①」虹影
「卜者」趙羊

白茅 43 1944.1.17. 星期一
（『申報周刊』復刊第十八号）

「寂寞的故事②」虹影
「使女 劳工歌集」水漪
「歲思」柴彥衡
「黃昏的啓示」蕭夢

白茅 44 1944.1.24. 星期一
（『申報周刊』復刊第十九号）

「解放了的人」斐麗
「雨天的歌 聆国立音専声楽
季考」司琦？（可均？）
「火的歡呼」嚴克

白茅 45 1944.1.31. 星期一
（『申報周刊』復刊第二十号）

「春臨」潔亞
「一隻殘老的齒輪」凌祖仁
「駱駝」戎戈
「歷程」徐揚

白茅 46 1944.2.7. 星期一
（『申報周刊』復刊第二十一号）

「嫁衣」任叔芳
「寒冬吟」石舟
「莫留戀過去」蔡炎炎

白茅 47 1944.2.14. 星期一
（『申報周刊』復刊第二十二号）

「賊」梁小萍
「襪子」佩几
「典當裏的春天」吳濤
「奴隸之泣」楊達明
「給『熱帶鳥』」諸葛心
「前進」蔡炎炎
「早起」旭齋
「新寒」曹余章

白茅 48 1944.2.25. 星期五
（『申報周刊』復刊第二十三号）

「慧姑」朱麟

「在窮崖絕谷裏」戎聖才
「止庵老人眉壽金婚詩」雲海
「寡婦的等待」藍漪
「題紀念册」諸葛心
「國業記」管仁發
「生命的真諦」華生

白茅 49 1944.3.3. 星期五
（『申報周刊』復刊第二十四号）

「念阿弟」唐敏
「春燕」金石
「友朋節雜詠」
○（王家吉）
○（趙希明）
「孤雁」華生

白茅 50 1944.3.17. 星期五
（『申報周刊』復刊第二十五号）

「海的夢」英才
「苦杯」嘉淦
「希望」士雄
「白茅週年」（水漪）
「醉太平」（春○閨？閨？）
「春望」水漪

白茅 51 1944.3.24. 星期五
（『申報周刊』復刊第二十六号）

「存摺」沙壤

白茅 52 1944.3.31. 星期五
（『申報周刊』復刊第二十七号）

「第一天」陸沙雲
「我愛旅行」程巨蓀
「語絲」○寫（儀宣？）

白茅 53 欠？

白茅 54 1944.4.14. 星期五
（『申報周刊』復刊第二十九号）

「竹青之死」朱麟
「讀書」勞碌
「風箏」蘭

白茅 55 1944.4.21. 星期五
（『申報周刊』復刊第三十号）

「小杏」瓊

「悼亡友」章
「代郵」本報總編集室
「女高音歌唱家 茅愛立女士」
枝
「遙遠的途徑」辛夷

白茅 56 1944.4.28. 星期五
(『申報周刊』復刊第三十一号)
「第二戰線」俞若文
「卜者」群非
「蘭心聆歌」伊苑主人
「可敬的同伴」潔亞
「夜聲」余章

白茅 57 1944.5.5. 星期五
(『申報周刊』復刊第三十二号)
「蝕」辛履
「勇士之歌」泓英
「今天天光還亮」江帆

白茅 58 1944.5.12. 星期五
(『申報周刊』復刊第三十三号)
「病」爛石
「代筆的話」徐如迅？
「風箏」曹余訓
「沙漠夜」胡若流

白茅 59 1944.5.19. 星期五
(『申報周刊』復刊第三十四号)
「像曉星般 零亂的回憶」范
振家
「更進一步」華華
「就說」徐明
「沙漠行」程起○
「評『血濺芙蓉』」古辛

白茅 60 1944.5.26. 星期五
(『申報周刊』復刊第三十五号)
「田園景色」石羽
「新生」戎戈
「悼亡友」唐敏
「燕來了」程会燦
「綠色的離情」顧依卿
「『十三妹』與『燕青與李師師』」
古辛

白茅 61 1944.6.2. 星期五
(『申報周刊』復刊第三十六号)
「三年」夢泓
「風化区」戎戈
「孤舟與水手」嚴克
「失眠的深夜裏」恩光
「影評『天從人願 觀後』」古
辛

白茅 62 1944.6.9. 星期五
(『申報周刊』復刊第三十七号)
「淚」桑神
「短簡 談做人」胡生權
「旅者自歌」余懷瑞
「木偶」志明
「劫後鴛鴦」古辛

白茅 63 1944.6.16. 星期五
(『申報周刊』復刊第三十八号)
「窓前的鴿影」劉嘉淦
「海濤的啓示」程巨蓀
「父親老了」儀宣
「黃昏」傅寶盛
「從小說到電影的『紅樓夢』」
古辛

白茅 64 1944.6.23. 星期五
(『申報周刊』復刊第三十九号)
「建設歌」江楓(?)
「國樂研究会 公開表演前奏」
海燕
「流星」朱鏡清

白茅 65 1944.6.30. 星期五
(『申報周刊』復刊第四十号)
「過節」袁鷹

白茅 66 1944.7.7. 星期五
(『申報周刊』復刊第四十一号)
「小惠」青鹿
「去学会了憎恨」江水
「友誼」可時
「煩惱與慾望」張詩洲

白茅 67 1944.7.14. 星期五
(『申報周刊』復刊第四十二号)
「陳媽」運晟
『外国人眼中的中国音楽』「中国
音楽的靈魂」H·斯維達洛
夫
「記中国古典音楽演奏会」L·
阿而諾特夫

白茅 68 1944.7.21. 星期五
(『申報周刊』復刊第四十三号)
「飛蛾」儀宣
「阿根和趙先生」中岬
「循環的矛盾——一位女性的供
狀！」紀恂
「夜聲」可鹿

白茅 69 1944.7.28. 星期五
(『申報周刊』復刊第四十三？
(四の間違い?) 号)
「惠」楠貞
「一幕」雨言
「薔薇之話」耀青
「白茅啓事」
「芸聲片片」

白茅 70 1944.8.6. 星期日
(『申報周刊』復刊第四十五号)
「脚的遺憾」任淑芳
「憂愁和白髮」耀青
「推動和補助」(維翰寄自東京)

白茅 71 1944.8.13. 星期日
(『申報周刊』復刊第四十六号)
「第三個孩子」朱麟
「浮生一章」胡生權
「老酒鬼」凌祖仁
「世紀末的瘋狂」俞若文
「飛蟲」鮑忠祈

白茅 72 1944.8.20. 星期日
(『申報周刊』復刊第四十七号)
「心弦小語——為紀念聽而作」
朱懿凡
「憶兒時 童年生活片段」胡
桑伊

白茅 73 1944.8.27. 星期日
（『申報周刊』復刊第四十八号）
「重逢」翼凡
「鑽鑽」陳世聰
「工作」波

白茅 74 1944.9.3. 星期日
（『申報周刊』復刊第四十九号）
「夜渡太湖」琪葵
「表姐的来信」若凡
「詩人」江瀾
「無題」黃炯鉞

白茅 75 1944.9.10. 星期日
（『申報周刊』復刊第五十号）
「戲水」人人
「老校長」凌祖仁
「枯井」朱鏡清
「欠陷之美」維新

白茅 76 1944.9.17. 星期日
（『申報周刊』復刊第五十一号）
「春夢」任淑芳
「一隻蜜蜂」蔣衛羣
「夜巷」邱煜
「蚊」邱煜

白茅 77 1944.9.24. 星期日
（『申報周刊』復刊第五十二号）
「九年忌」明烟
「畢業」小鶯
「夜」江水
「影」江水
「獻詞」唐弢

白茅 78 1944.10.1. 星期日
（『申報周刊』復刊第五十三号）
「生活和工作」泓英
「談襯托」嚴克
「人類」心影
「文芸簡訊」

白茅 79 1944.10.8. 星期日？
（『申報周刊』復刊第五十四号）
「提琴的故事」美里爾作
「推薦『教師萬歲』」－介紹給

「關心教育者」林丘
「中西音樂義奏 玲後誌感」
淑均
「投稿須知」

白茅 80 1944.10.15. 星期日
（『申報周刊』復刊第五十五号）
「友愛永徘徊」陳鏡如
「做父親的悲歌」徐嘉鈴
「人生之謎」倪孝同
「生日」王志誠
「觀吳中行攝影展」家西

白茅 81 1944.10.22. 星期日
（『申報周刊』復刊第五十六号）
「經濟學士」朱麟
「『颯』創刊号評介」海雀
「晨思一章」曉尼

白茅 82 1944.10.29. 星期日
（『申報周刊』復刊第五十七号）
「月下」桑神
「処世」蓓蕾
「喜鵲與烏鴉」楊石年

白茅 83 1944.11.5. 星期日
（『申報周刊』復刊第五十八号）
「婦宿」金毓明
「評中芸的『欲魔』」嵐影
白茅 84 1944.11.12. 星期日
（『申報周刊』復刊第五十九号）
「違心之曲」方正
「蟋蟀」蔣衡群
「辛勞的行程」胡生權

白茅 85 1944.11.19. 星期日
（『申報周刊』復刊第六十号）
「別離前夕」明烟
「晚」君羊
「秋」君羊
「徵稿簡約」
「代郵」編者
「腳踏車的故事 為『交通安全運動』作」嵐影

白茅 86 1944.11.26. 星期日
（『申報周刊』復刊第六十一号）
「殞星」儀宣

白茅 87 1944.12.3. 星期日
（『申報周刊』復刊第六十二号）
「離愁」徐明
「面包」沈淪
「可泣的故事」司空藍
「小陽春」史蒂
「一紙文憑的代價」藍平

白茅 88 1944.12.10. 星期日
（『申報周刊』復刊第六十三号）
「修磨」史亭
「光明的來臨」蔣巨涛
「大東亞戰爭三〇年紀念製成
兩津籍祝勝利」陳荃

白茅 89 1944.12.17. 星期日
（『申報周刊』復刊第六十四号）
「做爸爸的話」唐敏
「論誑言之類」時習之
「孩子們的事」司空藍
「月夜」君羊
「我的錶」蕭毅

白茅 90 1944.12.24. 星期日
（『申報周刊』復刊第六十五号）
「古城」川我
「自然、曲和画」桑紫
「雲南起義 觀感」史華

白茅 91 1944.12.31. 星期日
（『申報周刊』復刊第六十六号）
「糖」侯千里
「描写自己」袁栩
「評『颯』第二期」諫（陳？）
心
「詩之王国」谷戈
「塔」白文

白茅 92 1945.1.7. 星期日
（『申報周刊』復刊第六十七号）
「夜曲」司徒薇
「明珠暗投」儀宣

- 「噩夢」史蒂
「沙漠之行」志蟹(雲?)
「路工」可人
「書」丁大心
「人生」羽
「短歌三章」麦耶
煩憂
自己的画像
黄昏的時候
「悲慘世間」朱麟
- 白茅 93 1945.1.14. 星期日
(『申報周刊』復刊第六十八号)
「貧病交響曲」任淑芳
「雪」藍羽
「一双破皮鞋」凌祖仁
「暮色炬火」桑柴
「誕辰」史蒂
- 白茅 94 1945.1.21. 星期日
(『申報周刊』復刊第六十九号)
「烟雲」林奔
「女演員」史亨
「洗衣女」西芸
- 白茅 95 1945.1.28. 星期日
(『申報周刊』復刊第七十号)
「獅子岩」耶瑪
「往情」方宜(宣?)
「寄明弟」史蒂
「我愛吉他」梅默之
- 白茅 96 1945.2.4. 星期日
(『申報周刊』復刊第七十一号)
「肉」侯千里
「砂粒」耶瑪
「梅」默之
- 白茅 97 1945.2.18. 星期日
(『申報周刊』第七十二号)
「畢業後」柳嘉淦
「沉默之章」田妮
「街頭一景」石岡
- 白茅 98 1945.2.25. 星期日
(『申報周刊』第七十三号)
「夜行」劉臨
「温情」凌祖仁
「給將畢業的朋友」袁鷹
「雨夜」方正
「燈的故事」藍羽
1 燈前小語
2 更夫和風雨燈
3 長明燈
4 燈塔
5 蛾和螢
6 尾声
- 白茅 99 1945.3.4. 星期日
(『申報周刊』第七十四号)
「無家漢」翼凡
「伸訴」方宜(宣?)
「苦葉」城下
「鋼琴天才李慈德」尤山虎
- 白茅 100 1945.3.11. 星期日
(『申報周刊』第七十五号)
「米」侯千里
「歡樂底鈴声—給姊姊—」城下
「訴苦」梅默之
「離愁」虹子
「給白茅」江水
「紀念白茅百期」
其一 胡生權
其二 陳心
- 白茅 101 1945.3.18. 星期日
(『申報周刊』第七十六号)
「海島」耶瑪
「感懷」夏○遠
「蘇州河」河溶
「望春草」藍羽
- 白茅 102 1945.3.25. 星期日
(『申報周刊』第七十七号)
「笛手」沙鷗
「梨花與海棠」淑芳
「痕跡及其他」玉○(書?)
- 白茅 103 1945.3.31. 星期六
(『申報周刊』第七十八号)
「小簡」劉臨
「生活之鞭」沈劍影
「捧夫」史蒂
「病」柯羣
病
拆字攤
- 白茅 104 1945.4.8. 星期日
(『申報周刊』第七十九号)
「阿藍」泓英
「紀周璇歌唱會」鐵鷹
「啼一題一個孩子的誕生一」
史蒂
「霧之歌頌」夏如
- 白茅 105 1945.4.14. 星期六
(『申報周刊』第八十号)
「掃路」川我
「烟蒂火」夏如
「小雲彩」商朱
「夫妻」袁鷹
「黄昏」田英
「隕寒」田英
- 白茅 106 1945.4.21. 星期六
(『申報周刊』第八十一号)
「水」侯千里
「自由——覆劉臨」翼凡
「拾遺記」陳實
「海洋美術展覽會徵畫」
「人生」俞若文
- 白茅 107 1945.4.28. 星期六
(『申報周刊』第八十二号)
「遙祭」伊萱
「別後」史蒂
「傷逝」方正
「小卒」白帆
「感情的舒展」蕭毅
「斷篇」胡生權
- 白茅 108 1945.5.5. 星期六
(『申報周刊』第八十三号)
「債○○○」霜晨

「為工作而犧牲」白丁
「流星」白帆
「浮萍輯」陸汶

白茅 109 1945.5.12. 星期六
(『申報周刊』第八十四号)
「出路」翼凡
「憶南湖」慶曾
「孤獨者」劉臨
「觀影小記『人海雙珠』觀後」
强華
「賣笛的」吳卞
「讀『星底夢』」方宣
「來函」
「請領稿酬」

白茅 110 1945.5.19. 星期六
(『申報周刊』第八十五号)
「膝下晨昏」林一松
「憶舊遊」秋萍
「控訴」黃沙
「塵埃」史亭
「『白茅』徵稿簡則」

白茅 111 1945.6.2. 星期六
(『申報周刊』第八十六号)
「阿順」李天深
「生之激盪」遠岩
「老餅師」紀可鹿
「九月夜」胡大麥
「請補印鑑」

白茅 112 1945.6.9. 星期六
(『申報周刊』第八十七号)
「鑄」侯千里
「浪花」黃沙
「我與社會」吳昆銘
「更聲」知行
「騙」川我

白茅 113 1945.6.16. 星期六
(『申報周刊』第八十八号)
「小鎮的人」夏如
「寄一」春宜
「窗下草」端木夢歡
「我和 T. B. 細菌搏鬪」羅沉
「逆流 並序」宋香

白茅 114 1945.6.23. 星期六
(『申報周刊』第八十九号)
「非分」岑嘉
「人生」令敵
「代郵」
「奴隸的愛情」曉風
「春天」林洪

白茅 115 1945.6.30. 星期六
(『申報周刊』第九十号)
「不曾發光的彗星」何炯
「不平凡的邂逅」王希堯
「昨夜」小沫

白茅 116 1945.7.7. 星期六
(『申報周刊』第九十一号)
「舅父」沈淵

「往那裏去？」志雲
「雞一童年雜誌一」王允

白茅 117 1945.7.19. 星期四
「街景」熊煥光
「浮生若夢」慕羣
「受寵」岑嘉
「尋風的人」夏如

白茅 118 1945.7.26. 星期四
「自立」夏俄
「生日」陸汶
「莫再留戀了」張孟昭
「再會吧！上海」廣伯

白茅 119 1945.8.3. 星期五
「老牌林文烟」岑嘉
「星星」蕭蕭
「詩二章」周元慶
自吟
感懷
「『谷音』評介」施青

白茅 120 1945.8.9. 星期四
「回鄉記」侯千里
「懷疑者」熊熾光

白茅 121 1945.8.16. 星期四
「小母親——寄 W——」宋廉
「我的影子」端木夢歡

本稿は、日本現代中国学会第 67 回全国学術大会（於愛知大学 2017 年 10 月）で行なった報告に基づく。